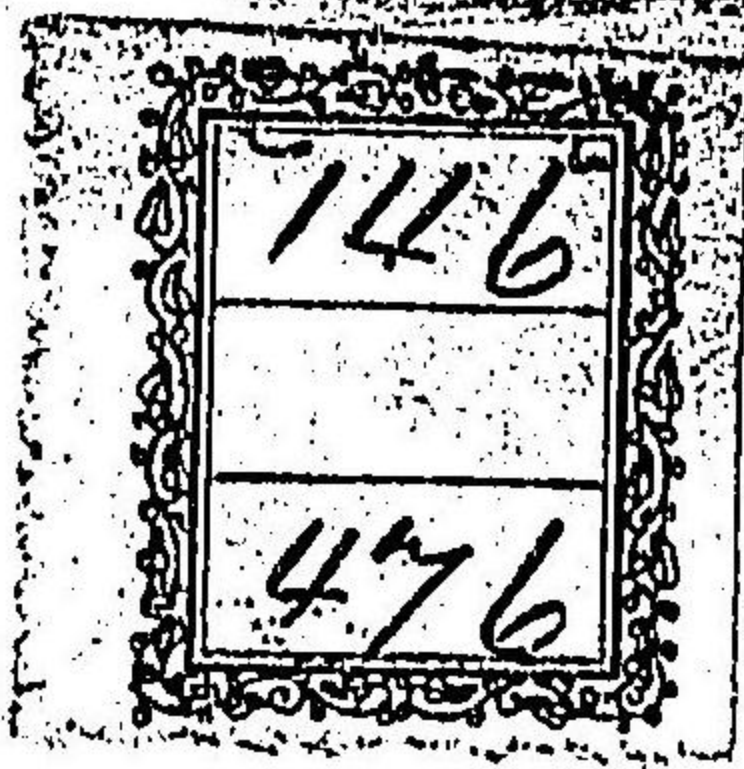


社會と文學

鳴 臯 書 院



4738

荒木 省三 (鷺泉)
今井 綠泉 合 著

流暢の筆明快の文社會の上下を通觀し文學の表裏を洞
察し富豪を叱咤し貧弱を慰撫し瀝車室の平等を説き寄
席の改良を論し其妙宛がも麻姑を倩ふて瘼處を搔くの
想あり亦所謂物其平を得ずして鳴るもの乎

084745-000-4

特63-61

社会と文学

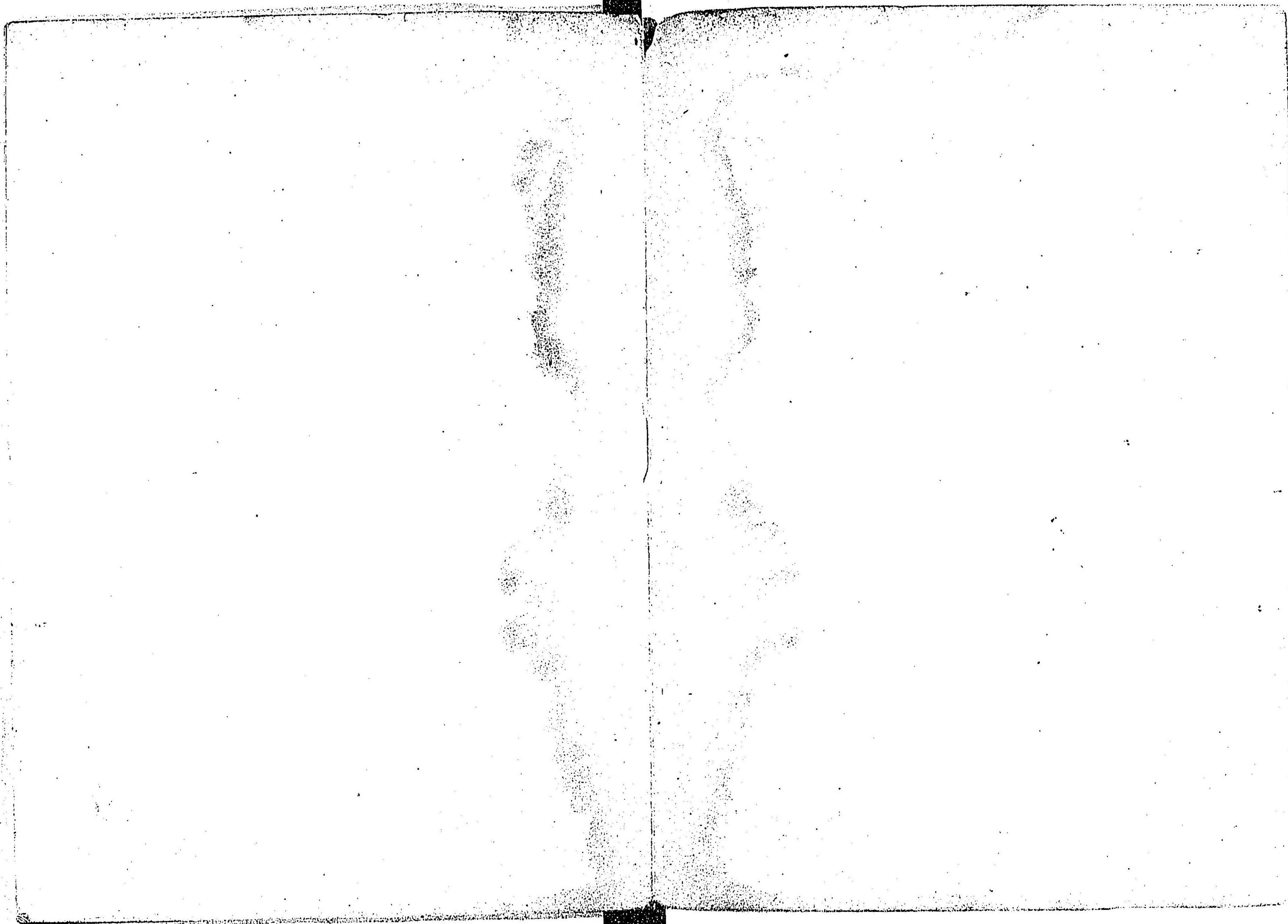
荒木 省三 (鷺泉)

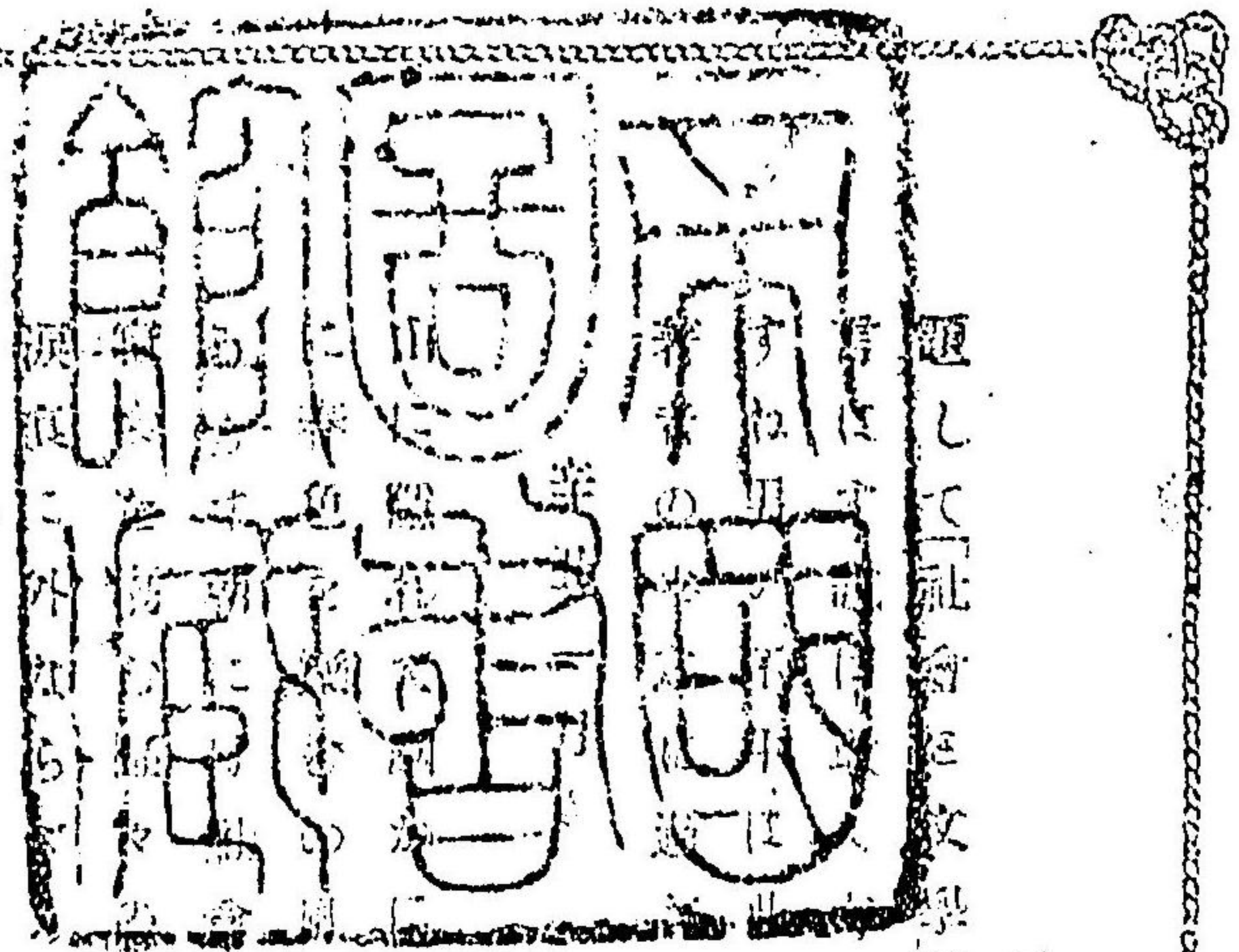
今井 綠泉 著

M34

DBA-0089







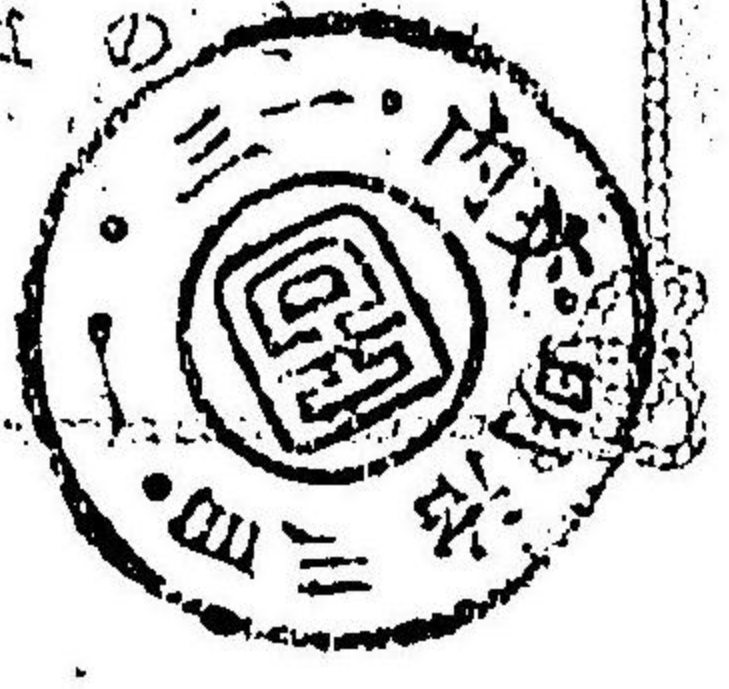
辛丑一月

題して「社會主義」
 と言ふ論は敢て斬新なり
 我なりと言はず當代無名の
 の如きかと言ふる人ありは
 ざるなり

鷺泉識

遠聲を友とし戀に酔ふて俗
 流は我等の如くして得る所に
 の心落を嘆き夕には文壇の
 小者誰し來れば亦是一掬の
 のみ

綠泉識



社會と文學

目次

自由平等	61
瀛車の平等	63
俗中の眞美	特
浪花節	八
藝人學舎	一三
同情の範圍の狹隘	二五
光明の方面	二七
犯罪	二九

時代と人物……………三二

貧富の同權と男女の同權……………三四

小犬よりの訓戒……………三五

娼妓の自由廢業……………三六

重なる新聞紙の一口評……………三七

二六新報……………四〇

教員……………四三

情育の不完全……………四五

自主獨立……………四八

提灯持……………四九

社會改良と文學……………五一

社會の墮落と文學……………五三

家庭と文學……………五六

文士と人格……………五八

文壇に於ける自由平等……………六一

輕佻なる文壇……………六三

性格と作物……………六五

理想の性格……………六七

時代と文學……………七二

閱歴と讀書……………七六

文界の暗黒時代……………七九

俗歌の文學的價值……………八一

泉鏡花……………八三

小栗風葉……………八五

我家の文學……………八九

附 錄 貧民の聲

一 挽く車……………九五

二 新聞賣……………一二

三 うちかれ女……………一九

四 女按摩……………一一八

次 終

社 會 と 文 學

荒 木 鷺 泉
今 井 綠 泉
合 著

自由平等

◎自由平等は予輩の理想也、社會のすべてか自由平等に趣きたるの日は、これやかて予輩が最も圓滿なる時期に予輩の理想點に到着したるの日として、予輩はこれに永住することに満足せむと欲するところ也。

◎夕べ静かなる湖のはどり、貴族となく平民となく、相萃まり相集ひて、猜疑なく嫉妬なく共に鼓腹して相樂む、抑も太古の蠻風は予輩の探らざるところなりとは云へ、無差別、無隔壁、和氣洋々とし

て湧くがどきは、予輩の希ひ望みて止まざるところにあらすや、予輩は決して事無かれと叫ぶものにあらず、事有れ、事有れ、寧ろ事有るを望むもの也、これ事は文明に伴ふて起る自然の現象なれば也、而も事有るがゆゑに、社會は必ず差別的ならざるべからざるか、文明に趣くに伴れて貧しきと富めるとは必ず懸隔せざるべからざるものなるか。

◎藩閥は日本の陋風也、黨派は個々の猜疑也、差別は上下の嫉妬也、黒塗馬車は猜疑の好表現たるものならずや、更に又ぼろぐのつゝれは嫉妬の絶好証跡たるものにはあらずや。

◎紅裙に千金を投ずるの華族様はあり、而も路傍に行立する可哀の非人に半錢を投與する仁者はなし、奕戯に万金を擲つ紳商はあり、而も孜々倦むを知らざる労働者に一片の慰言を寄するを惜まざる義人はなし。

◎富めるは緑酒に酔ひ、貧しきは汗水に濕ひ、富めるは貧しきを虐待し、貧しきは富めるに畏服す。

◎共に人なり、互に人權を尊重せざるべからざる也、「金」なる一個の物質的勢力に依つて、富めるものは貧しきを賤み、貧しきものは富めるものを尊重すべきの理、何處にかある。

◎光明遍く照らす一堂の下、以前の貧者も以前の富者も、以前の華族も以前の新平民も、共に手を握り、共に歩調を整へ、邦家の爲に憂へ、邦家の爲に喜ぶの時、うれいづれの日にか來らむ。

瀛車の平等

◎瀛車に上中下の差別あり、上等は華族様を乗せ、中等はゼントル

マン殿を乗せ、下等ばわれら平民を乗せて走る。

○嗚呼、滔々たる社會の差別的勢力は、徒に奔騰、徒らに疾走して遂に實用的の汽車にさへ、一、二、三等を別たしむるに至りしか。

○而もこれわが社會の勢力、上流人士の精神、われら平民と共に語り共に笑ふを屑しとせざるに因るなれば、今更何といふとも是非なき事也。

○是非なしと云ひて打棄て置けば、社會は暗黒より暗黒に移りて遂にその底止するところを知らざるべき也、今の時に於て社會を改良せむと欲す、その成功必しも保し難きにあらざる也。

○予は社會を改良する第一着手として、先づ汽車の平等を唱へむと欲するもの也。

○北海の北、九州の南、到るところとして敷設せられざるものなき

は鐵道線路にあらざるや、而して北海の北、九州の南、到るところとして瀰漫せざるものなきは、實に上下差別の最大陋風にあらざるや。

○鐵道線路は年々歳々蜘蛛の巣のごとく到るところに敷かれ、差別の陋風は滔天の勢を以て歳を加ふるに従ひ到るところに蔓る。

○汽車に階級を附するは社會の陋風の表現なると共に、高きをして愈々高からしめ、低きをして愈々低からしむる最大原動力たらざるべからず。

○今の所謂華族様、セントルマン殿の腦裡を解剖せよ、彼等はたゞ一個の卑むべき慾の觀念を有せるのみ、而も黄金は彼等をして傲慢ならしむる也、美衣は彼等をして不遜ならしむる也、物質的勢力の

偉大なる、今日のごときは求めて得べからざる也。

○今の平民なるもの、腦裡を解剖せよ、教育ある者、教育なきもの

區別はあらじも、いづれも共に實直に働き、質朴に動き、虚譽を願はず、虚名を貪らず、やがて社會に忠なるものにはあらずや。

○事、畏れども皇族の御車はこれを別となして、他は華族平民を問はず悉くこれを平等にせしめよ、一車の中、所謂平民の實質ある言語を耳にし、慘憺なる勞働談を聞くを得ば、彼等貴紳なるもの、多少の良心ある以上はこれに感動せらるゝことなしとせんや、更に無智蒙昧なる者をして、貴紳の言論を聞き、その實質なき談に止まるを察せしめなば、貴紳なる者が彼等が尊敬し畏服し來りし程尊からぬを知らしむるに足らむ。

○かくのごとくにして、汽車は進行せむか、上なるものは次第々々に下なるものを尊び、敬い、親み、憐むに至り、下なるものは次第々々に上なるものを睦み、近け、戒め、叱するに至らむ、最も圓滿なる方法を以て、貧富の懸隔を打破する、これに過ぎたるものあらじや。

○予は、上流下流の人の最も簡便なる集會所として先づ汽車に就いて言ふ。

俗中の眞美

○「よく見れば薺花咲く垣根かな、嗚呼これ芭蕉が偶々物に感じて歌へるところにはあらずや。」

○而もこの句を歌ひしときの芭蕉は、閑寂靜肅なる一個の俳諧師にはあらず、寧ろ情熱火の如かりし好個の社會改良鼓吹者なりし也。
○泥水の中、枯野のはどり、汚穢なり、荒涼なり、而も汚穢なる中、荒涼なるはどり、必ずしも美のひろめる事を否定し去るべきにあらずや。

す。

○嗚呼、よく見れば到るところ何處として美の存在せざるわらむや、
 頽れ傾きたる山家の垣根にさへ、薺の花の美しく咲き匂ふものを。
 ◎乏しい哉、具眼者の數、俗と見れば直ちに以て卑むべしとなし、賤
 と見れば直ちに以て惡むべしとなす、焉む知らむ、俗なる中、賤
 なる中、幾多の眞珠のその影を隠せることを。
 ◎俗間の眞美を探索して、これを改良し、これを適用し、以て彼等
 下層社會の人間を慰藉し、啓蒙するは予輩の双肩にかゝれる最大任
 務にはあらずや。

浪花節

○世態は千差万別也、極めて高さもの、極めて低きもの、極めて貴
 きもの、極めて賤しきもの、世態は實に千差万別也。

◎而もその高さものを無暗に高しとして崇め尊び、その低きものを
 無暗に低しとして輕むと賤むは、今日社會の常情にはあらずや。
 ◎更に社會の現状に憤慨してその低きものを高きに導かむとの心あ
 るもの、露はどだにあらぬは、今日社會改良の任に當るもの、常情
 にはあらずや。

◎上なると下なるとの差別ます、甚しくなり、貧しきと富めると
 の懸隔いよ、劇しくなる、また所以なしとせんや。

◎彼れ浪花節は少くとも今日の社會より疎むせらるゝもの、一也、
 益なくして疎むせらるゝは詮方もなし、而も彼の如きはうの用ひ方
 の如何に依つては莫大の効を收むるに足るものあるを信ず、かくの
 如くにしてなほ彼を疎むず、焉む予これを眼ある社會として許すを

得○け○じ○や○。

十

◎試みに浪花節を聴かむがために、木戸錢携へて寄席に趣くものを見よ、印絆纏にあらざれば紺のすんどに限られたるにあらずや。

◎また聴きしことなきものにして、あれは極めて下卑なものだとか、あんなもの聴きに行く者の心が解らぬとか云ふ、かくの如くにしてわが社會は果していつの日にか自由平等の理想の境に進入するを得るや。

◎自己の娯樂として之を聴かざるを咎めず、而も下層社會の感情を陶冶し、趣味を養成する方便として之を利用するを知らざるを責めざるべからず。

◎浪花節は講談に節つけたるもの也、由來、節あるものは節なきものよりも人心に印象を残すこと夥し、なほ韻ある文の比較上韻なき

ものよりも人の頭腦を烈しく刺撃するが如き也。

◎これを正路に導いて慣用せんか、人情の極微を穿ち、聴者をして無量の感に堪ゆるらしめむ、浪花節は茲に於て既に藝術の範圍に入りし也。

◎而もこれ到底今日の浪花節家にては不可能の事に属す、彼等由來無學蒙昧、未だ藝術の何物たるを知らず、情育の如何なる意義なるかを知らず、下層社會は彼等に依て毫もろの感情を陶冶せられず、趣味を修養せられず、たゞ徒らに淫を覺ゆ、盜を學ぶのみ。

◎予が前述せし「用ひ方の如何に依つて莫大の効益を收む云々」は實に茲を云へりし也、浪花節家の陶汰はこれやがて「浪花節を良く用ふる」にはあらずや。

◎然れどもこれ浪花節家の罪のみ、浪花節そのもの罪にあらず、

之を以てその改良さまで難事にはあらざる也。

○同じく藝人といふもの、落語は單に氣晴しの目的を充たすに過ぎず、講談は堅つくるしくして却つて興味うすし、獨り浪花節に至つてはうの節ある點に於て他に優れるが故に、落語講談の如きよりはるかに人心を陶冶するに効力あるものとす。

○先づ浪花節家の品位を形造れ、廣く書を讀ましめよ、うの鼠小僧的思想を去らしめよ、而して人情の機微を察して強く之を刺戟せしむるやう心掛けしめよ。

○手はかへすぐも浪花節の用ひ方如何によつて高くも低くもなるべきを主張すると共に、世人が社會を利用するに足る材料をかゝる卑き場所より求め來るだけの眼光なきを憫まざるはあらざる也。

藝人學舎(上)

○世に憐れなるものはあり、而も上下の隔壁に障げられて教育を受くるを得ず、望まじき仕事に有り付くを得ず、空しく下層社會に沈淪して、日が出でより星の出づるまで汗水流して働きて、僅かばかりの報酬を得て、細々どろの日を送り行く人類の團結はと憐れなるものはあらざるべし。

○彼等か千載に一遇の快樂となすところは、偶に僅かばかりの餘裕を得て、五錢の白銅携へて寄席でも奢るか、さらすば又、小格子の安花を一枝手折る位のところ過ぎざる也、憐むべきの限りにはあらざるや。

○これを以て彼等の理想低きが故也とて彼等を賤む者あり、而も予

は彼等を賤む者の心意を了解するに苦む者也、何者、彼等不幸にして無學、書を読む能はず字を解する能はず、かくのごとくにして如何で理想の高尙なることを得んや、予は寧ろ罪、彼等自身にあるにはあらずして、彼等に何の教育を興へず、何の監督をなさず、どうとでも勝手になるが宜かるべしと極めて香氣に構へ居れる上流の地位を汚し居る蛆虫にありと断せんと欲するもの也。

◎寄席は彼等が第一の慰籍者となるところのもの也、落語、講談、義太夫、浪花節のごとき、主として彼等を相手となし、その生命を維持し行くがごとし、試に一日十五日の工場休日に寄席を覗き見よ席はおほむね彼等によつて充たされ、後れて行く者は殆んど尻を据ゆる場所さへ無さがごとき有様なるにはあらずや。

◎予は豫め一言す、人間の嗜好はその人の行爲に極めて多大なる影響を及ぼすものなる事を、即ち人の行爲はその嗜好の如何に依て極めて非常に善悪の差別を生じ來るものなることを。

◎果して然りとせば寄席が彼等の行爲品性に及ぼす影響果して如何程なるか、思ひ知るべきにはあらずや。

◎由來彼等は理性の修養に乏し、従つて事物の善惡正邪を判別する能力に乏しき也、されば彼等が落語浪花節を聞いて、一度び面白と思ひたるものは、その審美上、將た風俗上如何程價值なきものにもこれを善きもの也、正しきもの也となして、遂にはその行爲の規矩をさへこの方面より取り來るに至るは、又是非なき次第にはあらずや。

◎理性の力の薄弱なるもの、極めて感情に強きは、東西齊しく一なるどころ也、予は今更彼等に字を學べ、書を讀めと無理強ひに強

ゆるものにあらず、強ゆるもの効なかるべしと思ひたれば也、何となれば彼等各々一定の職業を有し、猥りにこの職業を抛擲するわけに行かず、この僅少なる時間に於て、始めてアルファベットの學ぶもその効實に鮮少也と思ひたれば也、寧ろ予は彼等の感情を脩養し、彼等の品性を陶冶し、彼等の人格を高尙ならしむるの勝れるに若かずと思ふ者也、而してこれを勉めしむるには彼等が嗜好の方面より利用の材を求め來らるべからず、予は茲に先づ今日の寄席に就いて問ふところなくばあらず。

○今日の寄席は果して彼等下層社會の良友たり、良師たるの資格を有するものなるか。

藝人學舍(中)

○今日の寄席は果して彼等下層社會の良友たり、良師たるの資格を有するものなるか、これ予の問はんと欲する所也。

○悲哉、予はこの問に對して毫も圓滿なる返答を聞く能はざる也。

○浪花節落語のごときは、他に多少取るところあるにも關らず、その光明は悉く闇黒に掩ひかくされて、墮落の底幾千丈なるかを知らず、

到底尋常一樣の方法にてはこれを救濟し得べからざるに至れる也。

○試みに彼等の高座に上りて辯述する讀物を檢し來れ、強盜談、情死談、姦通談、狹斜談、蓋足未だ寄席を踏まざるもの、思ひ半ばに過ぐるものあらむ。

○況んや、讀物は多少の高潔なる趣味あるものとするも、彼等藝人のすべてが道樂上りなるに於てをや、聽者の歡心を買はむがために、わざと尾緒を添えて、淫猥の氣を増さしむるに於てをや。

○極めて純潔なる男にしてこれらの寄席に趣いて始めて狹斜通ひを
覺ゆるも、爪彈の音の床しきを覺ゆるも、甚しきに至つては姦通な
るものゝ面白さをさへ覺ゆるものもあるべし。

○極めて無垢なる女にして、これらの讀物を聞いて始めて男ぐるひ
を覺ゆるも、亭主の横取りを覺ゆるも、浮氣稼業の面白さをさへ覺
ゆるに至る者もあるべし。

○今日の下層社會はその肉体と精神の餘裕に於てこれらのことを學
びつゝある也、今の下層社會の教師は（予は事實に於て藝人が下層
社會の教師たる事を信する者也）の業務として實にこれらの事を
教へつゝある也、下層社會の人間、墮落せざらむと欲するも得べか
らざる也。

○嗚呼、彼等不幸、理性の脩養乏しきが故に猥りに他に犯さる、犯

さるものゝ罪ならずして犯さしむる者の罪也、今日の寄席のごと
きは實に下層社會墮落の大原動力たるもの也。

藝人學舎(下ノ上)

○予をして先づ藝の人心に及ぼす機能を説かしめよ。

○彼れ藝なるものは、その適用の如何に因て、人心に極めて偉大な
る影響を及ぼすもの也、その用法宜しきを得れば人心を高尙ならし
め、悪しきに陥らば極めて多大なる害毒を與ふるもの也。

○下層社會の人はおほむね教育なし、教育なきが故に書物を讀むに
不便也、高尙なる人士と交際するに不便也、而も彼等は完全なる五
官を有せり、加ふるにその處世の上より得たる普通の頭腦を有せり、
目も働けば耳も動く也、彼等が品性を陶冶せむと欲するものは、須

く茲を考へざるべからざる也。

○書物に依つて精神を修養し、品性を陶冶する能はざる以上は、勢ひ聽官に依りて高尚なる話説を聞き、頭腦に依つてこれを分拆綜合し、而して後に自己の行爲を高尚ならしめむやう勉むべき也。

○圓滿なる藝はるの品の何に關はず最も善良なる教訓を彼等に與ふ、藝人にして眞に藝の爲に盡さんとする覺悟あらんか、彼が一講一説は、無智、未だ讀書力を有せざる所謂下層社會の人間の品性を陶冶し、精神を修養し、理想を遠大ならしめて、不知不識の間に彼等をして完全なる人間に近かしめむ也。(よしその學識は進歩せざるまでも、意志をして圓滿なる發達を遂げしめ、人格をして高尚なる發育をなましむるに至らば、その人は既に完全なる人間となれる也、人間として。)

○而も今日の藝の價值たるや、予が中段に於て述べしところのごとし、かくのごとくにしていかに彼等をして善良なる方面に趣かしむることを得べけんや。

○予は思ふ、今日の藝をしてかくのごとく腐敗せしむる所以のものは、その藝人の品性のあまりに墮落せるが故也、その精神のあまりに腐敗せるが故也、彼等はおほむね道樂上り也、食ふこと出來ぬところよりしようことなさにこの様な職業にありつきたる也、乃至は又勘當息子の食ふや食はずの境涯に陥りて始めてかやうな仕事をせうと考へつきたし也、學識あるにあらず、才藻あるにあらず、きはめて沒趣味なる記録を機械的に暗記し、これになは一層腐敗せる尾緒を添へて聽客の歡心を買はんと欲するのみ、彼等の境涯も憐むべしと雖も、彼等によつて墮落の境に陥る今の下層社會の人間こそ、實

に憐むべきの限りにはあらずや。

○嗚呼、藝人を陶冶し、藝を高尙ならしめ、而して下層社會の墮落を救済するは、實に今日焦眉の急務にはあらずや。

藝人學舎(下ノ下)

○如何にしてこれを救済せんか。

○予は今の時に當つて、一の有力なる有志者の出づるありて、一個の藝人學舎を建設して彼等が智識を開拓し、品性を修養し、機智を活用するに至らしめむことを絶叫す。

○彼等は道樂に慣れたれば、放逸なる方法に依てはとてもの素行を改めしむること能はざる也、必らずや一人の監督者ありて彼等を教育し、訓誨し、叱斥せずむばあらずる也。

○藝人學舎を建設して先づ何をか教ゆる。

○予は文學を以て、先づ教ゆべきものなりとなさんとす、これ文學は人の品性を圓滿ならしむる點に於て、人の同情を深からしむる點に於て、人をして現實以外の樂を望ましむる點に於て、他の諸學に比してはるかに偉大なる功力あれば也。

○文學に依て高尙優美なる教育を受けしめよ、彼等をして淫猥以外更に一種の美あるを知らしめよ、彼等をして「こちどらの嗅」以外に更に高尙なる言語あるを悟らしめよ、彼等をして自信の念に富ましめよ、少くとも「おれは人から卑められる藝人である」どの念を翻さしめよ、而して藝人の天職の那邊にあるかを知り、藝人の責任の重く且つ大なる理由を解せしめよ、文學はたしかに精神を光明なる方面に導き、品格を高尙ならしむる唯一の良藥たる也。

○兎も角も彼等の感情を修養せしめむが爲、人格を高尙ならしめむ爲、藝人を一堂に集めて、懇切に周到に文學的教授を施さんには、彼等が一身の上に於ては云ふに及ばず、社會に及ばず効益の偉大なる、蓋し計り知るべからざるものあらん。

○蓋し、今日の下層社會は、善惡を問はず、彼等を以て唯一の教師と頼み、教師の品性の高尙なると下卑なるは、彼等下層社會の人間に影響を及ぼす事極めて大也。

○俗間の趣味を養成し、俗間の快樂を高尙ならしめ、俗間の品性を圓滿ならしめむ爲、概括すれば俗間の墮落を救濟せむが爲め、予輩の意の存するところを諒して、身を挺んで、藝人學舎を建設せんと欲する一人の志士はあらざるか、嗚呼、一人の志士はあらざるか。

○予は、社會改良の第一着手として、先づ藝人學舎建設の議を提出

する者也、些々たる故障何かあらじや、紛々たる俗評、何ぞ關せむ、吾人は吾人の信ずる所を述べ、信ずるところを行ひて倒れて後に止まむの覺悟ある而已。

○予輩と志を同ふするもの、幸にしてわが墮落せる社會に存するならば、速かに來つて予輩を助けよや。

同情の範圍の狹隘

○冷酷なる世にもなほ一片の同情の籠れるを認むること、難きにあらざる也。

○慈善會のとき、孤兒院のとき、これを証してあまりあるものならずや。

○設立者が、利慾以外に立つて墮落せる社會を救濟せむと欲する念

の熾んなる、吾人と雖も之を認むるに吝ならず、否、吾人は充分に彼等が熱誠のあるを認めて、墮落せる社會の爲に、極めて熱誠なる感謝の意を表する者也、彼等は少くとも利慾以外に立つて、社會を改良せむと企圖しつゝある熱血兒也、今の世に珍らしき同情家也。

◎而も如何にせん、彼等が全情の範圍は極めて狹隘にして慈善の露に霑さる者は極めて少數なるを、都督に於ける肉体精神の畸形兒は彼等に依つて多少は救はれたるがごとし、而も都會は雜圃の街たる也、多少の惡弊あるも、目に見耳に聞くところに依つて不知不覺の間に、智園を開拓され行くは争ふべからざる事實也、田舎は全然これに反す、彼等が見るところのものは山川草木のみ、彼等が聞くところのものは虫韻禽聲のみ、智識を開拓するものなく、光明を望ましむるに足るものなし、不具なる精神肉体はいよく不具に傾

き、生涯田舎に埋もれて物笑ひの種となる、可憐ならずとせんや。

◎慈悲何等の設立諸氏は未だこゝに思ひ及ばず、先づ手近きより始む、吾人は多數の都會畸形兒を救済するよりも、寧ろ少數の田園兒を救済するの、社會救済上効果著きを一言して、熱心なる諸氏の益省を促さんと欲す。

◎願くば同情の範圍を擴張せよ。

光明の方面

◎世道は頹敗せり、人心は腐蝕せり、我等が藉を置ける社會は、塵敗に腐敗を重ねて、今や殆んど底止するところを知らざらむとす。
◎詐偽、強盜、殺人、情死、万引、あゝこれ實に今日の社會を形成する主要なる要素にあらずや。

而も世は廣し、人は多し、茫漠たる社會の一隅に於て、幽かなる光明の影を認め得ること難きにあらす。

然り、世は未だ全然腐敗し盡くせるにあらず、一道の光明は未だ全然暗黒の中に掩はれ盡されしにあらず、社會改良策を講せんとなす必ずしも難事にあらざるなり、今の時に於て絶望す、予は寧ろ其大早計に抱腹せずむはあらざるなり。

◎社會に最も大なる影響を與ふるものは實に新聞紙なり、新聞紙の中、社會に最も大なる影響を與ふるものは蓋し三面記事なり。

◎うの利を與ふる點に於て、うの害を流す點に於て、新聞の三面記事は實に最も鋭き、最も劇しき能力を有す。

◎果して然りとせばこれを利用して、社會改良に力を盡さしむる、豈に難事なりとせんや。

◎而も今日の三面記事は如何、果してよく社會改良の任を全ふするに足るものあるか、吾人は直ちに以て、さなりと頷くを得ざる也。

◎嗚呼、三面記事なる哉、彼は社會の暗黒的方面を寫して未だろの光明の方面を寫さず、徒らに清淨潔白なるものをして盜を學ばしめ淫に耽らしめんとす。

◎今の時に當り誰れか挺身逆浪に投し自ら社會改良の任に當らんとするものぞ。

犯 罪

◎罪惡の動機は那邊に伏在するものなるか、これ吾人の先づ聞かむと欲するところ也。

◎人性善なく惡なし、冷々水の如く淡々霞のごとし、水は天候に依

つて性を變じ、霞は晴雨に依つて質を變ず、人の性たる、又この水の如く霞のごとく其境遇に依りて變化す。

◎罪惡の動機を以て意志の薄弱なるにありとなすものあり、或は半ば意志の薄弱に因て、半ば社會の待遇の冷酷に過ぐるに因すとすものあり。而も予はこの兩者のいづれにも贊する能はず、寧ろ罪惡は社會の作るどころ一より十まで社會の造るところと絶叫するを恐れざる者也、人若し予が言の矯激に失するかを疑はば、乞ふしばらく心を靜かにして予が言はんと欲するところを聴け。

◎人性は極めて冷淡なる者也、彼が生れながらにして成長せんか、彼は泣きもせざるべし、笑ひもせざるべし、もとより罪惡なさを犯さんやうもあらざるべし、彼をして情を解するに至らしめ、涙を解するに至らしめ、慈善事業を興すに至らしめ、大罪惡を犯すに至らしめ、

しむるもの、一に社會の力に依るにあらざるは無き也。

◎社會が彼を保護し、厚遇し、優待するならば彼は決して罪惡を犯さざるべし、彼が罪惡を犯すは一に社會が彼を擯斥し、冷し、虐待するに因せずばならず。

地

◎彼が窮困するは彼自ら窮困するにはあらずして社會が彼をして窮困せしむる也、犯罪は概ね窮困に因す、果して然りとせば犯罪の動機の社會に因すること、極めて明白なる事實にはあらずや。

◎思慮なくして徒らに言を成すものは駁せむ、彼魯鈍、無智、一定の職業に就くを得ず、窮困するは彼れ自ら之を招ぐ也、いかで又社會の無情を恨むべけむや、と。

◎何ぞ夫れ言の妄なるや、魯鈍無智とは何を云ふぞ、人性善なく惡なし、魯鈍、無智などの名稱を彼に與ふるは以ての外の事也、彼を

して魯鈍無智なることくならしめしは、彼の罪にあらずして社會の罪也、彼れ不幸、貧家に生れて完全なる教育を受くるを得ず、他のお公卿様育ちに比して魯鈍無智ならざらむと欲するも得ざる也。

○貧富の懸隔は社會の進歩につれてますます劇しくなり行くなり、貧者は世の冷遇を受け、富者は世の厚遇を受くるが文明社會の常態となれり、貧に育ちて教育を受くるを得ず、徒に世の虐待を受けて泣く、嗚呼、犯罪者の心中、また實に察するに余りある也。

○貧富の懸隔は誰がしわざ、人若しこの問題の根原を知るを得ば予が犯罪の動機を以て社會にありとなせし理の那邊に存するかを解するを得む、また多言を要せざる也。

時代と人物

○人物批判の第一要諦を以て、その當時の社會性を観るべしと云ふものあり、我は寧ろその迂を嘲らすむばあらざる也。

○夫れ行爲は未だ眞にその人物を批判するに價するものにあらず、時代の爲に往々にして効果を收むるに至らずして止みたるもの多ければ也、而も之が故を以て、時代觀察を人物批判の第一要諦となすは愚也。

○人物批判の第一要諦は、その批判せらるる人物の意志を觀るにあり、事の成ると成らざる時は時也、境遇也、事成りたるが故に彼は始めて偉大なる人物たるにあらず、意志強固なるが故に彼は偉大なる人物たる也。

○意志強固、加ふるにその境遇是、その行爲善なりとせば、天下何物か之に過ぐる者あらむや。

○人物批判の第一要諦はその人物也、意志也、性格也、第二は時也、境遇也、運命也。

貧富の同権と男女の同権

○貧富の同権を説かずして男女の全権を説く、その説の世に省みられざる故なきにあらず、事を論せんと欲せば先づその本末を探りて而して後に論を起すべき也。

○男女の同権は女権を擴張せしめむが爲に唱へられたる問題也、貧富の全権は人権を擴張せしめむが爲に唱へられたる問題也、女権と人権といづれが重き、女は人の半也、人を説いて始めてその一部分たる女に及ぶべし、貧富の同権を説かずして男女の全権を説く、これはうのあまりに考へなきに可笑せずはあらず。

○始より男女全権を説いて女権の尊重すべきを知らしむるは難事也、而も人権の如何に尊重すべきかを知らしめて後、女権を尊重すべきを知らしむるは極めて易し。
○凡る事は秩序的なるを要す、事秩序的なればその効を奏すると迅速也、多大也。

小犬よりの訓戒

○曾て雑圃の街衢を過ぐ、車去り人來りて殆んど眩せんとするばかり也、道の真中にありて可愛らしき小犬の、さも香氣らしく尻据ゑ居るを見る。

○偶々走せ來る腕車は正に彼を轢りて去らんとす、我は人事ならぬ犬事ながらも、覺えず腋下に冷汗の滴るを覺わたり。

○瞬間、犬は身を躍らせてはるか彼方に逃げ去りて、恰も我身を毀けられんとせしを覺ゆるが如くありき。

○平生身を處する事極めて沈着、而して急めるに及びて忽ち機敏に、忽ち迅速に、一刀兩斷的の處置を下す、予はかの紅塵の中にころがり居りし一個の可愛らしき小犬によつてこれを教へられぬ、教へられて我身の舉動に對し冷汗脊を露はすを覺ゆるき。

○予は犬のすべてを學べと云はず、たゞうの沈着なる點と、心中斷なき點と、決斷力の強烈なる點を學べと云ふ。

娼の妓自由廢業

○娼妓の虐待は人權の尊重論となり、人權の尊重論は娼妓の自由廢業許可となる、喜ぶべし、社會は儘に自由平等の理想境に向つて一

歩を進めたる也。

○然もこれに續起すべき弊害はなきかと問ふものあり、予は答へぬ、如何にも弊害は百出すべし、而も嚴正剛毅、用意周到なる警官はその防禦策を既に充分に講せしならむと。

重なる新聞紙の一口評

○今日の新聞紙の中最も勢力を有するは『萬朝報』也、讀者の弱點を捉ふるの機敏なる、彼のごときは到底他に求むべからざるところ也、而も商買に抜目なきもの必ずしも完全なる新聞紙にはあらず、彼が報道の敏速なるは我も人もこれを多とするところ、而も彼がうの三面記事に於て、如何程の害毒を世間に流しつゝあるか、如何程多くの娼婦奸夫を製造しつゝあるかは具眼者の知るところなるべし、彼

が口にせる勸善懲惡は眞の勸善懲惡にはあらずして、反對より見たる勸善懲惡也、予は『萬朝報』が一日も早く嚴肅なる家庭に入れられざるに至らむことを願ふもの也、これ等の特色とするところがすべて腐敗、墮落、勸惡の記事なるが故也。

◎『日本』は商買の新聞にはあらず、十年一日、毫も社會の變遷を知らざるがごとし、従つてその讀者の範圍常に一定し居るものごとし、時流を逐はず、世の嗜好に投せず、常に自己の信ずるところを述べ信ずるところを行ふ、嚴肅なる家庭に入れて差支へなき代りに、社會の上下一般にこれといふほどの利益をも興へず、要するに毒にもならねば藥にもならぬ新聞紙也、社會は彼の存在を否定、否、攻撃せざるべし。

◎『毎日』は濁流を抜ける活氣ある新聞也、人權を尊重し、勞働を神

聖視し、富者を罵倒するところ、世に珍らしき新聞也、かの娼妓自由廢業の許られたる當時のごとき、かれがいかに活氣ある言を以てこれに賛同したりしかを見れば以て彼の特色の在る所を推すに難からざるべし、要するに現時の新聞紙中、一旗幟を立て、堂々陣を張る風變り新聞也。

◎『富士』は紙面狹小、報道遲鈍、到底他の新聞紙に勝るべくもあらねど、その三面記事の劈頭に於て社會の善行者を紹介せるごときは聊か我意を得たるもの前にも述べし如く、社會に最も大なる影響を與ふるものは三面記事にあればこの適用如何に依つて社會は不知不識の間に改良せられ行く也、彼れ『富士』はこの意を體して社會光明の方面の描寫に勉む、殊勝ならずとせんや、予はこの微少なる新聞をして最も偉大なる勞力を得せしめて、萬朝一輩の徒を後へに鞭

若た、しむるに至らむ日を待つ、否、社會がさほにまで進歩するにまらむ日を待つ者也。

◎「時事」は軀軀ばかり馬鹿に大きくしてその癖特色も趣味もなまらぬの大木に過ぎず、「朝日」「報知」「日々」「大坂毎日」「大坂朝日」等とり立て、云ふほどの價値も無きがごとし。

◎「二六」は別に論じたり、こゝには云はず。

「二六新報」

◎數多き今日の新聞紙の中、予の最も愛するものを「二六新報」となす。

◎何が故に「二六新報」を愛する乎、報道の迅速なるが故にあらず、記事の精確なるが故にあらず、論評の奇抜なるが故にあらず、此等

の諸點に於ては予は更に他に、愛すべき新聞紙の存在するを信ず。

◎嚴正に於ては「日本」に及ばず、博識に於ては「時事」に及ばず、高雅に於ては「讀賣」に及ばず、素破抜きに於ては「萬朝」に及ばず、予が「二六」を最も愛する所以果していづくにかある。

◎「二六」は自由平等の新聞紙也、氣概と自信ある新聞紙也、貧富の懸隔以外に立てる新聞紙也、人權を尊重する新聞紙也、實踐躬行を主義とする新聞紙也、義侠に富める新聞紙也、弱者の爲めに萬斛の涙を漉ぐを惜まざる新聞紙也、この故を以て、予は「二六新報」を以て最も愛すべき新聞紙となす。

◎曾つて「東京日々」が彼を呼ぶに詐僞の二字を以てせしを聞き咎めて、社員を派して之を詰問し、連日の紙上にこれを責めて罵倒し盡し、「日々」が取消を公にするに及んで漸く筆を投げしが如き、以て

彼の氣概と自信あるを証するに餘りあるにあらずや。

◎彼が三井を攻撃し、その内幕をあばき、その驕奢を責め、果ては三井をして幾万の金員を出さしめしがとき、以て彼が貧富の懸隔打破を以てその主義となすを見るに足るものあるにあらずや。

◎娼妓自由癡業の聲盛んなる頃、彼れが吉原某妓の依頼を受けて、自ら死地に突入し、九死の中に一生を得て、可憐なる娼妓を事なく泥水の中より救ひ上げしがとき、以て彼が任侠に富めると、實踐躬行を主とするを証するに足るにはあらずや。

◎權門の跋扈、上下の差別、徒らにこれを慷慨する悲歌の士はあるも、未だ進んでこれを打破せんとするものはなし、この間にありて獨り「二六」のゐるあり、常に實踐躬行を主として徒らに叫ばず、狼狽に憤らず、聊か以て人意を強ふするに足る。

◎故に數多き今日の新聞紙の中、予の最も愛するものを「二六新聞」となす。

教員

◎理を以て云へば教員は愉快にして神聖なる職業はあらざるべし然れども今の教員はどつさらぬ、馬鹿氣たものはあらざるべし。

◎智識情性未だ幼稚なる少年を開發誘導して、智育を施し、情育を與へ、徳育を授け、而してその幼稚なる點を除き去りて、完全なる人間を作るはこれ教員天賦の責任、誰れかこれを愉快ならず、神聖ならずといふものあらむや。

◎思ふに教員は徹頭徹尾徹身的にその職に當らざるべからず、貴重なる人の子を邪徑に走らしめず、無缺なる人間とならしむる大責任

を負へる教員にして、どうでも勝手になれの心づくにてうの職に當らん乎、人の手を傷くる事いくばくなるか計り知るべからざる也。

◎而も今の教員は一個の祿盗人に過ぎず、教員の眞の責任を知らざるはいはずもあれ、義理一片(俸給に對して)に學校に出で、義理一片に教授をなし、而して俸給を受領する日を待ちつゝある一個の祿盗人に過ぎず、試みに彼が精神を解剖せよ、嗚呼彼が精神唯一の我慾あるのみならずとせんや、將來社會の活舞臺に飛躍せむとする多望の少年を養成する教員にしてかくのごとし、滔々たる天下、腐敗の氣を以て充たさるゝ、豈に偶然ならむや。

◎教員は生徒を教ゆる器械也とは、某憤慨生が今の教員を罵つて叫びし言にあらずや、あゝ器械なる哉、器械なる哉、何ぞ夫れ今の教員の器械と酷似せるや。

◎「先生」と呼ばれむがうれしさに教員の職にあるはまた無邪氣也、而も目先さにぶらさがり居る俸給なる觀念に驅られて、器械的に致へられし學科を、再び器械的に授くるに至つては、教員の墮落も亦甚しからずや、乾燥無味なる器械的教授は人の子に利益を興ふるものにあらず、教員たるものよろしく猛省一番、ろの自己の天職の那邊にあるかを速かに覺知すべき也、教育は徹頭徹尾献身的職業なるを知れ。

情育の不完全

◎今の中學教育の學科中にて最も不完全なるは情育にして、予輩の最も痛心に堪はずとする所也。
◎何が故に情育は不完全なるか、これ教育の事に當るものがあま

に無見識に過ぐるが故也、彼等は文藝を以て一の遊戯と思へり、かゝる些末なる遊戯に貴重の時間を費すは惜むべき事とおもへり、無見識ならずと云はざるを得んや。

○何が故に情育の不完全なる教育を痛心に堪へずとなすか、子弟の頭腦を乾燥無味たらしめ、有爲の少年をして畸形的發達を成さしむるが故也。

○今の教育者が、不具なる國民を製造するに巧みなる、今更ながら一驚を喫せずはあらず。

○感情は人間精神の大部分を占むるもの也、人、いかに智識に富めるとも、意志いかに強固ならむとも、物に觸れて冷々、事に當つてさはめて淡淡ならむか、その人遂に塵界に齷齪し、小事に拘扼し、慾張一天の人となりて、その精神にまた綽々たる餘裕なきに至らむ。

○我慾以外、現實以外、精神に餘裕ある人はど人格の高尙なる人はあらざるべく、人格の高尙なる人はど世人の尊敬を受くる人はあらざるべし、予は人格修養の逕路として、今の中學教育に大に情育の分子を交われし事を熱望する者也。

○中學時代は最も教育の當を得易き時代也、何んとなれば學生の頭腦未だ薄弱にして、善にも赴き易く、惡にも走り易き時なれば也、教員者はこの時代(中學時代)を利用して完全なる人間を造らむ事に勉めざるべからず。

○社會に出で、現實的潮流に棹したる以上は、もはや情育の必要を説くも詮なし、腦髓未だ散慢なる中學時代に、大に情育の完全ならむことを望む、豈に故なしとせむや。

自主獨立

◎自主獨立は人々美德中の美德也、自主獨立の人は最も尊敬すべし。予は敢へて獨り働いて獨り食ふ、これのみを自主獨力なりと云ふにあらず、自主獨立は單にかくのごとき外形的美事に止まるにあらず、要するに自己の精神を自己となして、凡百の事業に當るの士こそ、實に自主獨立の士なるなれ。

◎忌憚なく言へば、予は實に獨立心の缺如せるが故に大なる失敗を招き、絶望の淵に沈みしもの也、而も人生必ず一の失敗なくむばあらず、予はこの失敗以來、翻然として悟りまた昔日の予ならざるに至りぬ。

◎生活の方便として人に依頼するものと、生存の方便として人に依

頼するものとあり、兩者互に異なりと雖も、而もその意志の薄弱なる、その品性の下卑なる、又その人格を保持すること能はざる點に於て兩者少しも異なるどころあらず、彼等人と生れて自己一身を養ふこと能はず、豈に憫むべきの限りならずや。

◎自主獨立は人の觀念中最も高尚なる觀念也、而して最も自由平等なる觀念也、華族の腦裡にも時として浮び、貧民の腦裡にも時として宿る、自由平等とは此謂也。

◎自主獨立は各人の頭腦に必ず存在せざるべからざる最貴重の觀念也、而も獨立は決して獨斷を意味するにあらず、個人主義を意味するにあらず、たゞその人格を高尚ならしめむことを意味するのみ也。

提灯持

○今の世に提灯持程多きはあらざるべし、政界の提灯持、實業の提灯持、官吏の提灯持は云はずもあれ、近頃文壇の提灯持さへばつゝ現れ來りしがこときは、まことに斯界のために嘆くべき極にはあらずや。

○文學は自我的のものたらざるべからず、獨立的のものならざるべからず、斷じて依頼心少なきものならざるべからず、貧富の差、賢愚の別あるも、文學はどこまでも獨立の質を帯びざるべからず、夫のみだりに人の提灯を持ち人の力によつて僅かに世に出でんとするものは、まさに美の神の前に首刎ねらるゝものたる也。

○文學は自我的の者也、文筆上には私交あるべからず、名聲の已れより高きものなればとて、年齢の已れより長せるものなればとて、その作物、その所論、幼稚なれば幼稚也と喝破せざるべからず、作

者の鼻息を伺ひ、作者の御機嫌を取り、悪く言つて怒らせては自分の出世に障るなぞどの恐懼心に驅られて、心にもなくこれを賞め、扱ては自己の作物のことも勉めて之れに真似るやうに心掛くるがごとき卑劣なるしわざは斷じて廢止せざるべからざる也、而も今の文壇この卑劣なる蛆虫によつて其巢を作られつゝあるを如何せん。
○苟くも文筆を以て世に立たんとする者は、如何にうの筆幼くとも、如何にうの名揚らずとも、徹頭徹尾自我の上に立たんことを念ずべし、提灯持は最も卑劣なる人のなす所、斷じて廢業せよ、自主獨立は文士の最も勉めざるべからざる所也。

社會改良と文學

○社會腐敗の原動力となるもの、多々數ふるに違わらずと雖も、要

するに肉の貪慾に旺盛なると、黄金渴望心の強硬なるの二に歸すべし、この二を更に總括して、予は社會腐敗の唯一原動力を以て現實的慾望の禁制し難きに歸せしめむと欲す。

◎慾望ある人間は光明を望む人間也、社會に對して積極的態度を取らむと欲する人間也、而も今の慾望の現實的方面にのみ止まらしむるに於ては、其弊流れて人をして小事に離礙せしめ、金錢に垂涎せしめ、我利主義に走らしめ、猜疑せしめ、嫉妬せしめ、果には滔々濁浪の天に漲る勢を以て社會の全部を腐敗し盡さしめん也。

◎如何にして此を救濟せんか。

◎國民の品性を皓潔ならしむるものは文學也、國民の嗜好を高尙ならしむる者も文學也、廉耻心を起さしむるものも文學也、洒落の氣象を養ふ者も文學也、將た現實以外、否、我利以外他に尊ぶべきも

のあるを知らしむる者も同情の念に富ましむるものも亦皆文學也、概言すれば國民の品性と嗜好とを高尙ならしめ、塵界に離礙たらざらしむるものは文學也。

◎文學の功かくの如し、社會改良の方便として、國民の嗜好の傾向を文學に導く亦妙ならずとせむや。

◎而も文學は利益のみあるにあらず、これが適用を誤りて社會に害悪を與ふることまた無きにあらざる也、請ふ之を次に述べんか。

社會の墮落と文學

◎社會の墮落を以て文學に歸せんとするものあり、蓋し一理あり。
◎人間は生れながらにして宗教心を有す、それ宗教は今の適用の善なるを得ば、人心に偉大なる感化を興ふれ共、不幸にして適用を誤

れば精神を毀くること、幾何なるか殆んど計り知るべからず、而も幸にして我國に寺院教會の設置あり、眞摯なる僧侶牧師の訓誨は、情者を邪徑に走せしめずして、愈々益々信仰の念を深くし、先天の宗教的情操をいよく確固ならしむるに至るを得る也。

○人間生れながらにして審美心を有す、下層社會の人間（世人の使用する語）が、その勞働の餘暇、南窓風しづかなるほとりに横臥して小説稗史の類を繕き、感極まつて覺せず膝を打つがときは、彼等が殆んど生れながらにして審美心を有せることの好証跡なるにあらずや。

○彼等はこれに依つて徐ろに感情を陶冶せらる、而も彼等由來教育卑く、理性の發達自ら幼稚なれば鈍き理性の力に依つて強烈なる感情を制御せしめむは、到底不可能の事に属す、彼等が往々にして

感情に逸して事を誤るはまさしくこれが爲也。

○文學（特に小説）の年々彼等に愛讀せらる、數の増し行くは慶ぶべき也、而も往々矯劇なる、悲愴なる情致は、彼等が情性を徒らに興奮せしめて、その力弱き理性を壓倒し、屢々にして法律道德の範圍外に走り出でしめむとする也。

○近くは夫殺しの大罪を犯したる佐賀の某女のごときは、實に涙香小史の小説に興奮せられてその意志を決行したりといふにはあらずや。

○文學は一方に於て國民に大なる利益を與ふると共に、その適用を誤るときは前述の如き害毒を流すもの也、吾人は、一の志あるものありて、宗教に於ける寺院教會の如きものをわが文學の爲にも設けて、國民の情性を訓戒し、陶冶し、以て彼等の天より享有せし審美

性を曲りなく發達せしめむことを切望して止まざるもの也。

家庭と文學

◎文學を家庭に入らしむるなかれと説くものあり、之れ文學を以て淫猥の媒介者のごとく考へ居る者の説也、痴、寧ろ憫むべきにはあらずや。

◎文學は何が故に家庭に入らしむべからざるか、彼等は曰はん、文學は其性概して優柔也、人の精神を損じ、人の意志を消極的に走らしむるにあらずれば、人をして未だ知らざる淫逸を覺わしむるのみ害、これより甚しきはあらざる也、と、吾人はむしろの淺薄なる見解を憫まんと欲す。

◎いかにも不健全なる文學は年少男女に害毒を興ふること甚しかるべし、而も文學のすべてが不健全なるに限りたるものなるか、予は文學の健全なるか否かをだに識別し能はざる家庭は、不健全なる文學を入るゝに先ちて早く既に紊亂すべき家庭なりしを信じて疑がはず。

◎よしたとへ優柔の氣を帯びたる文學なればとて、その父母たる者にして心するところさへあらば決して兒童を害することあらざるべし、優和なる文學を以て、その没趣味の天性を融和せんとするは、まさにこれ父母たるもの、天職にあらずや。

◎理性、意志の發達と共に、情育も曲りなく發達するにあらざれば、完全なる人間とはいふべからず、兒童をして畸形的發達を遂げざらしむるはこれ父母の職責也、而して情性を修養するには必ずや文學の力を借らざるべからざる也。

◎文學は兒童の想像力を發達せしめ、全情心を豊富ならしめ、性格を偉大ならしむる最大要件也、文學の歡迎せらるゝ家はさはめて圓滿にして幸福なる家庭也、そのこれに溺るゝと否と正しく父母たるもの、賢愚に依りて岐るゝなり、故に云ふ家庭には必ずや文學なかるべからずと。

文士と人格

◎説くものあり、文士は社會以外に超然たらざるべからざるもの也、彼を評するは彼が詩を標準として評すべし、彼が詩にして氣韻勝れたるものあらむか、彼はやがてこれ大詩人たる也、その素行品性のこときは、文士を評價するに於て一文の價值だに無しと、嗚呼言何ぞ妄なるや。

◎文士は人間情性の教育者たるべき天職を有す、科學の教師が人間の理性を啓發し、倫理の教師が人間の意志を強固に導くがごとく、彼は慥かに人間の感情を陶冶し、趣味を養成すべく造られたる也、否天は彼に此の重大なる責任を負はせて彼を地上に生れ出でしめたる也。

◎彼が云ふところはずべて消極的たるべからず、彼が行ふところはすべて積極的たらざるべからず、彼は人を破壊せむが爲に生れ出でしにあらざ、彼は人を建設せむが爲に上帝の命を受けて生れ出でし也、徒らに花を尋ね蝶を追ふは文士の職責にあらず、又徒らに人世を悲觀して墳墓を戀愛するは等しく文士天賦の職責に逆ふところ也、◎彼が詩は詩學上、美辭學上より評價すれば、少くとも價値ある作物なるべし、而も情性教育學上よりこれを評價すれば彼が詩は徒ら

に人間精神に不快なる感覺を興ふるのみ、利なきは云ふ迄もなし、寧ろ絶大なる害毒を興へつゝある也。

◎既に文士が人格を修養する必要絶えてあるなしと云ふ、蓋し無理ならじ、何となればこの言を發せしむる源泉たる文士に於て、既にしか云はしむべく用意したれば也、而も源泉既に濁れるを知りてこの言を成すものあり、妄も又甚だしと云はざるべからず。

◎文士はどこまでも健全なる情性教育家たらざるべからず、單に作物に於て健全なるに止まらず、その人格に於てもまたひとしく健全ならざるべからず、若しその人格に於て不健全なるものありとせしか、天下幾萬の教を受くる讀者の品位に害毒を流すこと幾何なるか、思ふに計り知るべからざらむ。

◎嗚呼、作物に於て既に不健全に、人格に於てなほ更に不健全なる

今日のわが文壇に巢を造れる蛆虫輩を如何せんや。

◎予は陳腐を願みして今日の文士に人格の脩養を勸めて止まざるもの也。

文壇に於ける自由平等

◎美の神は博愛の神也、嫉妬の神にあらず、平等の神也、差別の神にあらず、春風、春風、ゆるやかに水汀の垂柳を吹くところ、貧者富者の隔てなく手を執り袖を連ねて睦び樂むを以て、最大樂事となしたまふは美の神、はあらずや。

◎煩はしきは壇詠家の猜疑的根性なるかな、惡むべきは大家を以て自任する人は許さず、蛆虫輩の天狗鼻なるかな。

◎彼等は能の秀ひでたるにあらず、才の抽んでたるにあらず、たゞ

僅かに學び得たりし學問の片碎を縫ひ綴り妄りに大言壯語して世渡する小才子に過ぎず、而もその鼻の高き事幾尺なるを知らず、自ら許して大家となし、博識となし、奇語を吐き難語を弄ぶ。

◎彼等は文學を以て自己の專有物となし、文學の讀者を以て自家の黨となす、難解の字句を用ふるは筆者の隨意たりとは云へ、文學のかくも狭少に解釋せらるゝを觀ては、吾人徒らに袖手傍觀するに忍びざる也。

◎彼等はなほ一種の畸形兒としてこれを許すを得る也、而も彼等の美衣を羨み美食を慕ひ、その殘涎にても嘗めんとする、末流の文士に至つては吾人遂に言ふところを知らざる也。

◎猜疑を除けば彼等の心中は零也、嫉妬を去れば彼等の情神は虛也、夫れ文士たるもの功名心あらざるべからず、燃ゆるがごとき希望な

からざるべからず、而も卑陋なる猜疑と汚濁なる功名心とは到底同一の談にあらざるべき也。

◎猜疑を捨て、嫉妬を擲ち、驕らず、氣取らず、共に文を論じ、事を語るはいづれの日や。

◎社會全般の自由平等は容易に望むべからず、而も文壇の大弊風を一掃するはさまで難事にはあらで、且焦眉の急務たるべき也。

輕佻なる文壇

◎少しく新奇なる問題の湧いて來るあれば、そのいつこの邊より湧き來りしか、何が故に起り來りしかをも確めずして直ちにこれに就しこれを駁す、輕佻の風は日本の社會全体を掩へども、文壇に於てその最も然るを見る也。

○彼等が脱稿を急いで之を賣らむとするも彌次馬也、世の流行を逐ひて世人の嗜好に投せむとするも亦彌次馬也、水津のごとく、漂流せむと欲す、輕佻彼等のごときはまさに我社會より放逐して可なる也。

○彼等口癖に已れを呼んで江戸ッ兒と云ふ、嗚呼彼れ果して江戸ッ兒なる乎、江戸ッ兒なる乎、警鐘を聞いて直ちに飛び上る彌次馬連は果して江戸ッ兒なる乎、われは江戸ッ兒の名のあまりに濫用に過ぐるを、眞の江戸ッ兒のために惜まざるを得ざる也。

○國民の品性は須く皓潔ならざるべからず、殊に國民の品性を陶冶すべき大責任を有する文士の品性は最も皓潔ならざるべからず、文士の理想はとりわきて遠大ならざるべからず、文士の見解は最も確固たるものなるべからず、これ無くば彼は到底文士の職責に堪ふる能はざる者也。

○今日の文壇、文士の職責を全ふし得るもの果して幾人かある、今の所論は昨の所論と異なり、昨の行爲は再昨の行爲と異なり、輕佻浮華、物を観るに何の定見なく、事を論ずるに何の思慮なき者、これ今日の滔々たる文士にあらずや。

○我は國民に品性の修養を勸むるに先だつて、先づ文士の輕佻を罵り、彼が品性を圓滿ならしめむ事を主張せむと欲す、蓋し文士の品性を陶冶するは、國民の品性を陶冶する第一要件なれば也。

性格と作物

○作物は作者の影、作者の性格の影也、いかほど客觀的にものしたればとて、そのいづれかに於て、作者の影を認め得べき也、特に

小説と云はず、韻文に於ても、論文に於ても、隨筆に於ても、但しはまた十七字の短詩に於ても皆然り。

◎風葉の作物は風葉の影也、「寢白粉」、「戀慕ながし」、以下の諸篇は彼が性格の暗黒なる方面を察知するに難からざるべく、「青葡萄」のごときは彼が性格の光明なる方面を察知するに足るものにあらざるや。

◎一葉の作物は一葉の影也、「一葉全集」に收められたる諸篇は、彼女がおとなしき女性の中にも、なほ一個侮り難き強剛の質を有せしことを証してあまらざるものにあらざるや。

◎宙外の評論は宙外の影也、穩にして健なる彼が評論は躁せず、騒がず、眞摯以て事に當る彼が性格を示す好個の表現にあらざるや。

◎露伴の作物は露伴の影也、「五重塔」以下の諸篇、社會に對する滿

腔の不平、抑へむとする能はず、僅かに一枝の筆に依りてその不平を擡べむとする彼がおもかげ、明かに紙上に躍如たるにはあらずや。

◎露伴の性格の偉大なる、その作物を讀んで覺えず露伴を尊仰せしむるに足る、他の作家は文を行ふに巧みなるあり、讀んで泣かしめ笑はしむるに足るものあれども、作物に對して肅然として襟を正さしむるものこれあるなし、われは、その性格の偉大なる點に於て、その着眼の高邁なる點に於て、露伴を尊仰し、露伴が再興起つてわが墮落せる文壇を刷新せむ日を待つ。

理想の性格

◎時の境遇を眞の生活となし、その境遇に安むじ、その境遇に左右

せられ、境遇汚るれば其身も亦汚れ、境遇清ければ其身も亦清きもの、予輩は之を呼んで骨なしとなさむ。

◎時の境遇を以て善も悪もなく偽の生活となして、その境遇に反し、その境遇を卑み、境遇清くとも境遇汚るゝとも、其身は飽く迄も清からむとする者、予輩は之を呼んですね者となさむ。

◎骨なしとすね者とは今日に於ては思想界の大部分を形成する二要素なるが如し、兩者の相容れざるはこれもとより自然の數にして、常に相反目し常に相嫉視す。

◎文士の性格にも亦この二大差別ありて、一は世に媚び、一は世に逆ふ、而も今日の文士の性格を通観するに、比較的骨なしはすね者よりも多く殆んど三に對する七なるがごとし。

◎江戸時代の戯作者はおほむね骨なしにしてうの中に風來山人のこ

ときはすね者ならむ、更に古に溯れば、清少納言のときは骨なしのごとく、長明西行のときは純粹のすね者なりしがごとし、西洋の名だゝるゝ文士はおほむね中正なる性格を備へたりしがやうなれば茲にその例を引き難きも、わが國の文士の多くは骨無しにあらざればすね者也、やゝ中正なる頭腦を持したりしは山陽、馬琴位のものなるが如し。

◎常識ある人の眼より觀れば、骨なしはすね者よりも見悪きがごとし、今の文士の多くはこの見悪しと云ふ骨無し也、文士の品位など云ふもの、もとより彼等の念頭に無く、腐敗せる時代の潮流におし流されて、外界の現象左せよと云へば左に赴き、右せよと云へば右に赴き、轉々流々、たゞその身を外物のなすがまゝに任し置くが如し、社會は彼等と呼んで遊治郎と嘲り、幫間と罵る、而もこれ社會

の罪なるにあらず、文學の罪なるにあらず、皆これ彼等自ら招く罪なる而已。

◎社會が骨なしを忌むこと、前述の如きも、而もすね者に對してはなほ聊か買ひ被り居れるがごとし、彼すね者は文壇に對して、社會に對してさまで價值あるものにはあらざる也、彼等はい徒に破壞的に社會を罵る而已、乃至は徒らに厭世的語句を并べ立つるのみ、所謂建設的にあらずして破壊的なる也。到底吾人が理想の性格となすに足るものにはあらざる也。

◎以上説き來りし所より、文士としての理想の性格に對する予輩の見解の那邊にあるかは、畧ぼ推し得るところならむ、予輩が理想の文士は骨なしにあらず、すね者にあらず、ろの立脚點を固く社會の活舞台に置きて、全時に又固く自己の見解を定め、自己の中心を保

ちみ、だりに世に阿らず、みだりに世を憤らず、之を要言すれば、予輩の理想の文士は社會的人物也、而も俗塵にまみれし俗物にあらず、高尚なる人間也、而も世と背く人間にあらず、熱情ある人間也、而も常識を缺ける人間にあらず、常に温厚なる言葉を以て、世と戦ひ、世を導く、予輩が今日の文士に切望するところは、彼等が如上の性格を持せし事也。

◎かゝる性格を持せる文士は、眞に文士の品位をも保つを得べく、又眞の文士の生活をも營み得べき也、營利に汲々たるにあらず、衣食に事欠くにあらず、最も川満なる、最も幸福なる生活を營み得べき也、大作物の出づる、大評論の出づる、まことに偶然にあらざる也。

◎今日の文壇、得難き中より搜し出したる、雪嶺、露伴、國外、遊

逸のこゝろはや、この理想に適さ性格を持せる者を見しは予輩の僻
目なりし歎。

時代と文學

これは北清事變の起りし際に稿したるものなればうのつもりにて讀まれたし。

◎天津の陥落、李爺の北上、日本軍の目覺ましき働さ、曰く何、曰
く何、東と云はず西と云はず、日日の新聞は悉く砲烟彈雨の記事を
以て滿され、その艶物語の三面記事をもへも手痒さ心地す況して文學
などの記事を掲ぐる暇あらずと云ふは、一寸聞けば尤ものやうなれ
ど、さては我國文壇のためにあまり情なき次第にあらずや。

◎元來日本の國民はおほむね其趣味卑うして未だ文士の生れながら
に有する天職を認知せず、國民全般のこれを認知する能はざるは除
儀なき次第なるべし、而も文士自身すらもこの自己の天職の何なる
かを知らずといふに至つては、打棄て置くわけには參らぬところ也。
◎文士の天職は實に時代の精神を描寫して、これを理想化せしめ、
以て俗界に煩悶せる人士を慰藉するにあり、この方面に於て成功す
ることなくむは、うは到底文學史に赫々の名を載する文士にてはあ
らざるべし。

◎紫式部は此方面に於て成功せりき、井原西鶴も亦この點に於て成
功せし也、近松も然り、坪内逍遙子も亦然り、シェークスピアや
ユーゴーなど、凡り文學史上鐘々の名を負へるもの、一としてこの方
面の成功に依らざるものなかりしにあらずや。

◎文士は閑人にあらず、行脚坊主にあらず、碁客仙人にもあらねば、
道樂師にもあらざる也、時代精神の理想化！これ實に文士が天よ

り授けられたる重大なる責任也。

○國民が文士を以て閑人となし、文學を以て道樂仕事となし、國事多端の際、新聞紙の一段を割くを惜むに至らしめしがごときは、罪國民にあらすして予はむしろ文士にある事を信じて疑はざる者也。

○今の文士のある一部の輩はいやに氣取り過ぎてミューズだの冥土だのと柄にもなき事を喋舌り立て、他の一部は、恰も蒞弱の幽靈の如く、骨なく腸なく、道樂さへすれば以て文士の天職を盡せりと誤解する馬鹿者也、國民をしてかの誤解を招かしめしもの、偶然ならざる也、新聞社が彼等の作物のために、一段の紙面にても割愛するを惜む、亦無理なき事也、彼等所謂文士には時代精神の理想化など云ふ事がわからざれば也。

○文士は惰眠を貪るの人たるべからず、文士は飽くまでも活動的人問たるべき也、時代と共に進み、時代の裏面を描寫して、墮落せる國民の昂性を陶冶すべき大責任を有する人也、文士の立脚地は必ずや健全なる社會にあらざるべからず、籍を活動社會に置いて、常に世と闘ひ、世を訓へ、世を導いて行く、文士の職責また愉快ならずとせんや。

○今世界の大国支那は敵を列國に受けて、東亞の雲行さいよく怪しく、電書續紛、新聞事業の繁忙殆んど目の舞ふばかりにして、日本軍先登の報告、正に我國民を狂殺せんとす、世界各國の物質界、精神界にわたれる繁忙、この時を措いて又他にあらざる也。
○嗚呼、この繁忙の際、箱根のほどり、日光の輿、世を知らざるがごとく、戦を聞かざるがごとく、ひとり枕を高ふして眠るものは彼等所謂文士にあらすや、國民をして閑人也、役立たず也、餘計な邪

魔者也と思はしむる、偶然にあらざる也。

○嗚呼、時は戦也、人は苦めり、現代の國民精神を描寫して、苦惱せる國民を慰籍するはまさにこれ文士天より享けたる大責任、願はくば世と共に進み世と共に變へ、世と共に樂み、而も世の塵にまみれず常にその理想の高尙ならむことを期せよ、予輩は文士今日の態度について、時代精神の理想化の必要を一言せざるを得ず。

閱歷と讀書

○閱歷と讀書いづれが偉大なる文士を養成するに與りて力ある乎。

○ユーゴの閱歷はこれやがてユーゴの名なりき、近松の閱歷は又やがて近松の名なりき。

○ジョンソンの讀書はこれやがてジョンソンの名なりき、馬琴の讀

書は、またやがて馬琴の名なりき。

○ジョンソンの名はユーゴの名に敢へて劣ることなし、馬琴の名は近松の名に敢へてゆづることあるなし、而も公平なる眼もて觀たる結果は如何。

○ユーゴや近松やは、閱歷に實のある文士なりき、ジョンソンや馬琴等は讀書を以てその素を養ひし文士なりき。

○文學は情的教育學也、其一言一句、科學の理性に於ける、德學の意志に於けると全様の影響を吾人の情性に及ぼすものとす。

○作者の頭腦にして情燃ゆ、熱溢れ、筆を執れば一氣立るに妙篇を作すに足るものあらんか、予は之を以て閱歷家の作と見む。

○筆を行ふこと遅々、一行成りて一時を消すもの、予は之を以て讀書家の作と見む。

○閱歷家の文には血あり、熱あり、すべての點に於て活氣あるを認む。

○讀書家の文は絢爛也、光彩あり、而も大体の點に於て捏造の跡あるを認む。

○翻つて讀者の側に於て見んか、彼は閱歷家の文を讀めば全然篇中の人と化し、共に泣き共に笑はむとす。

○而も讀書家の文を讀むでは、徹頭徹尾、篇外の讀者となりて、冷かに、而して靜かにうの文を味はんとす、彼は篇中に釣り込まれたるにわらず、たゞ極めて冷靜の態度を守れる局外者而已。

○讀者の嗜好、未だ閱歷と讀書のいづれが重きやを斷定するに足らずと雖も、其の感情に影響する兩者の程度を推想すれば、茲に又何れを先とすべきかを窺ひ難きにわらず。

○閱歷家の文は偉大也、崇高也、うの文悉く自己の影なれば、情熱おのづから迸り讀者をして覺ゆる快哉を喚ばしむ。

○讀書家の文は優美なり、綺麗なり、而もその文おほむね他人の影なれば、情熱薄く、讀者に與ふる感興又きはめて少きがごとし。

○文學の價值はうの讀書に寄する感興の程度によつて定まる、即ち讀者をして無我の境に入らしむるものを以て最も價值ある作物となす。

○この點に於て、最も勢力あるものは閱歷家の作物なり、予は文士がその傑作を公けにするに當り第一の要件は閱歷なりと信す。

文界の暗黒時代

○舊文學殆んど地を拂うて新文學未だ成らず、文士は瑣々たる問題

にうの頭腦を勞し、國民は瑣々たる文學に堪へ兼ねて新文學の一日も早く成らむことを絶叫しつゝあり、嗚呼今は夫れ文學の過渡時代なる乎。

◎過渡時代とは暗黒時代を意味す、歐洲哲學に於けるスコラ哲學は舊思想より新思想に移らんとする際に現はれたる哲學也、時代の暗黒時代なりしごとく、スコラ哲學はたしかに暗黒の哲學なりし也、嗚呼、今の文界何ぞ夫れスコラ哲學に似たる甚しきや。

◎舊文學の倒れむとするは喜ばしき現象也、新文學の興らむとするは喜ばしき現象也、而もきはめて微細なる爭論に半年一年を費し、わけのわからぬ創作に驚然騷擾し、暗中をたどり行くがごとき今日の文界は、予輩の最も煩悶に堪ざるどころ也。

◎快刀一閃、亂麻を斷つ一個の文豪の現れ出で、暗黒に煩悶せる

國民を慰藉し、自ら新文學界の霸を握り、墮落せる文界の秩序を統一するに至らむ日を待たむかな。

俗歌の文學的價值

◎俗歌を以て卑猥也、げす也、風俗壞亂也、三文の價值だに無きもの也となすものあり、言あまりに妄ならずや。

◎如何にも俗歌の中には卑猥なるものもあり、されどその多くは、極めて美はしき辭を以て人情の極美を歌ひ、きはめてなつかしき詞を以て美しき自然の風物を歌ひたるもの、今の生硬なる和歌などに比してはるかにその趣味の饒多なるを覺ゆるものあり。

◎かの人口に膾炙せる。

君とわかれて松原行けば

松のつゆやら涙やら
のごとき、情緒纏綿、陳腐なる所謂詩人の吟詠に勝るを覺ゆ。
◎又たかの。

松ばつれなやこれ見よがしに

落葉ながらも二人づれ

のごとき、云ひまはしの巧妙なる、俗文士の到底企て及ぶ能はざる所也。

◎これは單に人口に喧傳せるもの、中より、故らに撰びたるものに過ぎねど、思想の清新なる、措辞の圓滑なる、また以て俗歌の價值を定むるに足らんか、俗歌を以て三文の價值なしとなす反對論者の氣はしれぬなり。

◎要するに彼等は、文學を偏狹に解釋するの餘、相引いて斯種の言

を吐くに至りし也、如何にも俗歌は極めて卑俗なる場所にもてはやさるゝもの、うの之を吟ずるものは土方職工藝娼妓の範圍内に止まるがごとき観あるも、而もこれが故に直ちに卑俗なり、文學的價值なしと罵るは、あまりに淺薄皮相の見解にあらずや。
◎予は俗歌を以て絶好の詩形也と廣言して憚らざる者也。

泉鏡花

◎文學は自由平等の性を有せざるべからずとは予が前に述べし所也、衆議院の議員も檉の下、乞食も共に文學の靈光を浴びざるべからず、予が言を裏面より解釋すれば、凡そ文學なるものは人間常識を對象として起稿せざるべからずと云ふに歸すべき也。而してこれ、文士が天より亨けたる職責也、社會に對しての義務也、然らずむば畢竟、

文學は社會に於て無用の長物たるに止らむ。

◎鏡花の文名噴々、正に文壇の霸を握らむとす、而も予をして鏡花を評せしむれば、鏡花は文士として(責任ある)世評ほどの價值あるものにはあらざる也、予は彼を評して文壇の畸形兒となすを憚らざる者也。

◎「清心庵」「鼻物語」「錦帯記」「湯島詣」の諸篇を一讀せよ、措辭の不調和なるは云はずもわれ、思想朦朧漠として五里霧中に彷徨するの思ひあらしむ、而かも彼を最負するものはこれを幽玄也とし、靈妙なりとし、人生の解釋記となせども、予は文學の普及的發達上、彼の著作は一文の價值なしと云ふに躊躇せず。

◎詩作は文士の職業也、而も自己一個の感懷、不平を洩らすばかりの職業にはあらずして、廣く世を教へ世を導き世人をして、現實以

外、更に光明遍照の理想あるを知らしむる大責任を有する職業也、これに依つて自己一人の精神を慰め、不平を撫せむとなすがごときは抑も偏見たる也、詩作は幾萬の國民を相手とせざるべからず、予が文學なるものは人間常識を對象として起稿せざるべからずと云ひしはこれが故也。

◎鏡花はこの點に於て、少くとも文士としての價值なき人也、文士の責任を無視せるの人也、彼の詩は彼の感懷を逸するに適すべく、文學専門家をして快哉を叫ばしむるに足るべし、而も人間情性を教育する責任を有する文士の作として、彼が作豈に半文の價值あらむや。

小栗風葉

◎われをして最も忌憚なく小栗風葉の性格と素行と作物とを評せし

るものあり、惜むべき哉、彼が才筆、彼が觀察、唯この一個の暗黒的性癖に依つて世に省みられざるに至らむとす、文壇の麒麟兒風葉の爲に、痛心に堪えざるところ也。

○われ嘗て西片町の某下宿に寓せしことありき、隣室に大學生某あり、常にわれと語りわれと笑ふ、風葉一日某を訪ねて共に飲むで虹霓の氣を吐く、われ夙に彼が才名を慕ふ、隣室にありて我はうの風葉なるを知り、某を介して共に語らんとす、而も酒漸く熟して、壁を隔て、洩れ来る喃々の醜語に、我は遂に氣を吞まれて顔出しをもなし得ざりき。

○直言を許せ、われは風葉の才と風葉の筆とを、今の文壇に於て多とする者也、素行を修めて筆を清めよ、俗文士に卓越すべき素質を有する風葉の猛省を促すこと如斯。

我家の文學

吾れはもとこれ文士だの詩人だのと仰山らしき名を附けらるゝ人間にあらず、たいわれは文壇の現状を見て文壇の現状に嫌らず、文壇の將來を思ひて文壇の將來を患ふるのあまり、一枝の秃筆を握りていたづら、煩悶する窮措大のみ、名あるにあらず、譽れあるにあらず、十年の一言に比して今なは依然たる吳下の舊阿蒙、世のいはゆる文士なるもの、詩人なるもの、圈外に彷徨して、文とは何、詩とは何と岡目にながめ居るのらくらもの、み、されどわれ愚かなりどは云へど、われに一の抱負なきにあらず、われに一の自信なきにあらず、われに又一の觀察眼なきにあらざる也。

われは今の文壇に對し、今の文士に對し、又讀書家に對して、夙に

めよ。

○『寝白粉』に才名を博してよりこのかた、風葉の名士女の間で喧しく、人みな彼の前途を想はざるものなきに至れり。今や彼、文壇の流行兒を以て人も許し自らも許す。

○彼は慥に文學に於て天才を有するの士也、今にして今の名あり、彼の前途、また壯ならずとせんや。

○彼は徹頭徹尾情の人也、理性の裁斷を仰がず、たゞ一個の情に依つて意志を決行するの人也、情の人、以て敬すべく又た卑むべし。

○情に光明の方面と暗黒の方面とあり、彼は正しくこの両面に跨つて事を行ふがごとし、彼がりの恩師紅葉を慕ふて止まざるは彼の光明的情の好表現也、彼が紅裙に垂涎し、小格子の安花に煩悶するは彼の暗黒的情の好表現也。

○彼が光明的情と暗黒的情とは、彼が作物をして一は光明、一は暗黒、兩者をして割然たる區別をなさしむるに足る、うの光明的描寫は正義を教へ、人道を訓ふ、その暗黒的描寫は人に淫猥を教へ、野合を訓ふ。

○人はこれを以て、彼が作物は彼の性格と關する所なしとなせど、予は寧ろ彼が作物を以て彼の影——彼の性格の影——となさんと欲す、彼が兩方面に跨れる情が、彼の作物をして自づと光明、暗黒の兩極に立たしむるは自然の理なれば也。

○而も彼は到底プラス、マイナスの人間にあらざる也、一の暗黒は十の光明を糲ふ、近頃に至りて評壇、彼の人格攻撃の鋒うやく鋭し、所以無きにあらざる也。

○彼れ酒を嗜み色を好むの病、既に膏肓に入る、また度すべからざ

るものあり、惜むべき哉、彼が才筆、彼が觀察、唯この一個の暗黒的性癖に依つて世に省みられざるに至らむとす、文壇の麒麟兒風葉の爲に、痛心に堪えざるところ也。

○われ嘗て西片町の某下宿に寓せしことありき、隣室に大學生某あり、常にわれと語りわれと笑ふ、風葉一日某を訪ねて共に飲むで虹霓の氣を吐く、われ夙に彼が才名を慕ふ、隣室にありて我はうの風葉なるを知り、某を介して共に語らんとす、而も酒漸く熟して、壁を隔て、洩れ来る喃々の醜語に我は遂に氣を吞まれて顔出しをもなし得ざりき。

○直言を許せ、われは風葉の才と風葉の筆とを、今の文壇に於て多とする者也、素行を修めて筆を清めよ、俗文士に卓越すべき素質を有する風葉の猛省を促すこと如斯。

我家の文學

吾れはもとこれ文士だの詩人だのと仰山らしき名を附けらるゝ人間にあらず、たゞわれは文壇の現状を見て文壇の現状に嫌らず、文壇の將來を思ひて文壇の將來を患ふるのあまり、一枝の秃筆を握りていたづら、煩悶する窮措大のみ、名あるにあらず、譽れあるにあらず、十年の一番に比して今なほ依然たる吳下の舊阿蒙、世のいはゆる文士なるもの、詩人なるもの、園外に彷徨して、文とは何、詩とは何と岡目にながめ居るのらくらもの、み、されどわれ愚かなりとは云へど、われに一の抱負なきにあらず、われに一の自信なきにあらず、われに又一の觀察眼なきにあらず也。

われは今の文壇に對し、今の文士に對し、又讀書家に對して、風に

一種抑ゆべからざるの不平を有せり、文士の徳義に對しての不平は、人既にこれを不平となせり、而もわれまたこれを不平としぬ、不健全なる文學に對しての不平も、人すでにこれを不平となしき、われもまたこれを不平となしぬ、讀書家の程度すこぶる低きも、人すでに不平となしき、われもまたこれを不平となしたりき、されど、わが文壇に對しての不平は、これにといまらで、なほ更に大なるものこそわりけるなれ。

所謂赤門派なるもの、文壇に現れ出でしは既に十年以前のことなりき、されどその實際一團結となりて、文壇に幅利かすやうになりたるは、實にこゝ五六年前のことに過ぎず、彼が文壇に出で、より、専心攻學、斯壇に貢献したるところの多かりしはもとより論ふべくもあらぬと、彼が文學の發達を阻害したるの罪、また決して少しと

云ふべからず、我は一面に於て彼が功勞を勞ひ、彼が熱心を賞するとも、他面に於て彼が罪惡を指摘し、彼を呼んで正に文壇の賊となさざるべからざる也。

◎由來文學は人間情性の慰藉者たるべきもの也、親友たるべきもの也、指導者たるべきもの也、すでに人間情性と云ふ、その意義、さへめて廣からざるべからず、上は王公より、下は乞丐にまで及ばざるべからざる也、ひとり教育あるもの、地位あるもの、財産あるものに限るべからざる也、文學の讀者は一般平等たらざるべからず、文學の編纂なる解釋は、到底肯綮を待たるものにあらざる也、彼はこの點に於て實に文學振興の阻害者なりき、一度かれが「文學はわれら専門家の文學なり、文學は赤門の專有物なり、文學の讀者は赤門出身以外に断じてあるべからざるなり、斯かる定義を下して

この、かた、世の無氣力なるくらげ文士、彼が勢力に恐れ、彼が毒舌に捲かれ、彼が歡心を買はむがため、靡然としてこれに赴いて、果ては文學は全然お公卿様風となり、世間知らずとなり、箱入となり、いたづらに高く構ゆるやうになり、文學は社會のある局部に停止するに至りぬ、かれは實に、わが文壇に於ける貴族主義鼓吹者の嚆矢たりしもの也、彼れがごとき、専横なる文學の解釋は、予輩の容易に蕪みし能はざるところ也。

花を見むと欲せば、われは人どいもに見む、月を愛でむと欲せば、われは人どいもに愛でむ、文を樂まむと欲せば、われは人どいもに樂まむ、われは不幸、生れついで赤門一派の才子の天狗鼻を持たず、文士にあらず、詩人にあらず、苟くも文を語らむとするものは、松公竹公の類なく、探つてわが友となさむと欲す、我家の文學はかく

のごとし、こゝに門戸を開放して天下全志の來り助ぬるを待



録附 貧民之聲

若葉亭主人作

こは多少考ふるどころありしを、識者の譏りを顧みずしてき
はめて俗調に、きはめて平易に綴りし、讀む人これを諷せよ。

一、挽く車

月は寒し池の端
絃歌のひゞきとたねして
猫連をつと引き上げて
月は寒し池の端

車一挺行き過ぎて
醉客二人行き過ぎて
鳥生三人行き過ぎて
不忍池の月さむし

上野おろしのさむ風に
薄着の身ふるはせて
乗客もあらぬから車
轍に似たる運命かな

むかし思へばうらめしや
父は豪家の一人子で

母は才ある今式部
われはその間の子ならずや

父はみまかり母は死に
われは妻得て子を生みぬ
妻はらうたく子は笑渦
あゝその笑の愛らしさ

波風たゝぬ家の内
富めるどにてはあらぬとも
妻とわが子のなぐさめは
巨萬の富にまさりけり

月^{つき}にむらくも花^{はな}に風^{かぜ}
うき世^よのさまのうらめしや
風^{かぜ}邪^{よこしま}の心地^{こころ}の一夜^{ひとよ}さは
やがて重^{かさ}なる長^{なが}の病^{びょう}

あゝろの病^{びょう}の癒^いえし日は
妻^{つま}はみまかり子^こも死^しにて
病^{びょう}みほうけたるこの我^{われ}ど
借^か金^{きん}のみずのこりける

この世^よは鬼^{おに}よ狼^{おおかみ}よ

慾^{よく}に飽^あくなき狐^{きつね}よど
妻^{つま}には別^{わか}れ子^こに死^しなれ
残^{のこ}りし我^{われ}は思^{おも}ひたり

わづかに残^{のこ}る家^か具^ぐ着^あ類^{るい}
賣^う代^{しろ}なしてその日^ひより
なれぬ車^{くるま}の力^{ちから}業^{わざ}
佛^{ぶつ}と神^{かみ}は世^よにありや

りれついでわが氣^き質^{しつ}
頭^{かぶ}を下^{くだ}げてあはれみを
人^{ひと}に請^こふとは男^{おとこ}として

とてもしのびぬところなり

向たる因果を忍びぬを

枉げて忍ばねばならぬとは

饅頭笠に顔ねはひ

「旦那お供も口の内

遇ふ人ごとに腰を枉げ

頭をさげてびよこくと

お供を願ふなさけなさ

これも何ゆる貧ゆるず

二重廻しの旦那様

あづまコートのおも

心の錦くらべては

いかで負けんとおもへども

殊につらきは北廓行きの

骨も無ければ腸も

腐り果てたるをのこらに

旦那と頭さぐること

榮華にはこるうじ虫よ

うき世はめぐる小車の

定めがたなき運命なり
思ひ見すやとおもへども

朝より夜まで稼ぎつめ
やうく烟立つる身の
わが身のさまを見ておれば
紺のすんばに饅頭笠

詰らぬ思ひ蘇し
また一かせぎかせがんど
不運車夫行き過ぎて
不忍池の月さむし

二、新聞賣

柳のふる葉風に飛びで
月はさむし丸の内
人はあらず家あらず
遠吠さゆる犬のこゑ

深あみ笠に顔おほひ
「都」二萬朝「日」本新聞
「三六」朝日の聲呀ねて
空にひいてあはれなり

一こゑ高くいなゝいて
やがて駟け来る二頭馬車
先き逐ひの聲にわれ知らず
首上ぐれば影もなし

塵を見送る眼には
不思議や奇しき光あり
光の底を見てあれば
わはれやそこになみだあり

なみだの底に言葉あり
「黒塗馬車に美衣美食

榮華は願はじ死ぬるとも
せめては病める妻が身を

「今朝立つ前に袖おさへ

「後生今朝だけ止してよ」と
われを止めし言の葉の
氣かゝりになるゆゑかな

「幸無き妻が身の上よ
才ある男富める男

世に多からむなべてこの
腑甲斐なきわれを戀ひしや

「世にも男と生れ来て
執るべき職業は多かるに
一枚一銭の新聞賣つて
われはその日を暮し行く

「賣れずのこりし新聞の
肩に重みをおぼゆれば
深あみ笠にろの果は
「今日の新聞五厘」かな

「風吹く夜も雨の夜も

寒まじりの雪の夜も
われはいとはじ、いとはねど
いとしの妻のあはれやな

鼠あばれるあばらやも
露もる屋根もいとはねど
病の床にくるしめる
妻が身の上あはれやな

「才ある人にとつきなば
今は大家の御新造様
あつきなさけにはだされて

何とて彼女を娶りけむ

「わが一枚の新聞紙

これを買るともたれ一銭
賣つて一銭わが妻の
くすりの代をいかにせむ

「無情冷か世の人は

一銭の金をしむでか
われを横目に冷笑し
そしらぬかはにすぎて行く

「巨萬の富をねがはんや

蠶の衣をのみまんや
われは兎もあれわがつまの
病を早く癒やせたらや

「妻や待つらむ病床に

今か今かどわが歸り
風のさむさに賣り溜めは
ここにわづかに十銭あり

「薬は買へどこの金で

焼半買ふてらへ土産に

都萬朝日本新聞
二六、朝日のこゑさむし

三、うかれ女

ひげすぎ夜もしんくど
漁色のやからあしたなて
くまなくすめる明月に
新内のこゑさむわたる

吹くや秋風さわくど
ものおもはする月のかけ

草葉の末のつゆの身の
われにもなみだなからめや

花のよし原花のさと
花のさきがけ媚を賣る
さても可愛ゆきたをやめど
昨夕の客は云はれたり

狐狸の窟なる
世にけがらはしき色街に
人の皮着るけだものど
こよひの客は云はれたり

水よりきよきわがからだ
うれころ心けだものゝ
世のうかれ男の機嫌とり
これも親ゆる夫ゆる

まことの親にてありもせば
實ある夫にてありもせば
われもこの世にやすくと
その日にくらし行くらむに

あゝ腹黒の親御かな

獣に似たる夫かな
われを苦界におとし入れて
左團扇の榮華とは

江戸見物どはいつに似ぬ
やさしき言葉とおもひしが
思ひかけさやこのわれを
欺しはからむたくみとは

否と頭を斬にふれば
さらば殺すとおどし文句
ゆるしたまへと泣き付け

これ見ぬかど九寸五分

非道のをのこわれはこれ

世にもかよわき女の身の

せんすべつきてなさけなや

花のくるわに賣られけり

緒熊頭に長しかけ

實名捨てゝろの日より

ねせみやびたる名をもらひ

われは格子に色を賣る

みどりの帳奥ふかく

夢もまどかにつがひ鴛鴦

うらやむとではなけれども

けふのわが身のあさましや

きなふはひがしけふはにし

腸もなきをのこども

心にもなく呼びとめて

心にもなきあだるふり

いやほど氣取るでれ男も

若様氣取る鼻下長も

いづれれた客のなさけなさ
われ平等に色を賣る

たまにお茶ひくその夜は
樓主のとがめはげしくて
食のものさへろくくくに
われにあたへぬあぢさな

一週一度の検査日は
地獄に近く心地かな
病院の月いたづらに
青くひかりてものですし

よろづのもの、靈長とは
たが云ひ初めし言葉や
われはあさまし色賣りて
これではよろづの靈長か

人に臭皮袋とあざけられ
かりにもこゝろあるもの
なす業ならずと云はれても
われはあらがふことばなし
これをおもへば胸みちて

いまはたなみだせきあはす
わが身一つの秋ならねど
千々にくだくるおもひかな

「花魁時」と部屋の外

こゑになみだをぬぐひつゝ
立たんとすれば外の方
あはれ新内のこゑさゆる

四、女按摩

おくしもしるくつささねて

そらをかすめてとぶどりの
つはさもたわゝふくかせに
みやこおほじのゆきゝたねぬ

角のおでん酒客たねて
どなりの鮮屋人たねて
辻待車夫居眠りて
通り少なのこよひかな

四十を越して二三年
まだ香もうせぬうばさくら
吹く笛あやしと見てあれば

あはれふたつの目盲いたり

風にからだを支ねかね

ころびんとするをやうやくに
杖にすがりて笛吹いて

「按摩上下五百文」

辻待車夫ののしりの

こゑは何ぞと眼を開いて
見じとはすれどはかなしや

兩眼開かず真の闇

あやしと啼いてむく犬の

噛まんとするによろくと
見ぬあたりを杖ついで

溜息吐いて足を止めぬ

「月夜ど人は云ふなれど」

盲いたる目にはやみよなり
夜よしと人は云ふなれど

盲いたる目には見ぬわが

「千駄木のほどり團子坂
黄菊白菊よしと聞け」

王子のほとりたきの川
もみぢ錦を織ると聞けど

むかしなりせばわれ行いて
榮華は出来ねど大空の
神のあたへし兩眼で
人にをとらず見むものを

人にわらはれ世の中に
あるかなさかの待遇を
受けてるの日をおくり行く
今は盲目の按摩なり

「生れついでに目盲ならば
人は笑はむ笑ふとも
わが身ひとつにあきらめむを
あきらめられぬ身の因果

「うはべにしきの人ごころ
悪魔の餌とわれなりて
世にもおろろし瘡毒の
わが身傳染りしその日より

「ありとあらゆる神々に

いのりをかけて一日も
早く病を癒やせてと
ねがひし甲斐もなかりしか

「あかつき方の大空に
きらめく星！どなたはれし
ふたつのまなこ閉ぢ果てて
この世は闇となりけり

「世にもつれなやかなの男は
盲目になると見し日より
あどくらませていづ方か

遠きあたりに逃げ行きぬ

「波風あらし世の海を
わたらむ楫もうしなひて
人の肩もみ腰擦する
按摩もこゝに二十年

「雨降る夜もゆきの夜も
月照る夜も風の夜も
細杖ついで笛吹いて
按摩上下五百文

「塵にもまゐるゝ世の人の
櫻に狂ひ月にあこがれ
紅葉にこゝろ染むるさへ
われは浮世のよりに見る

「人になぶられあなごられ
世のあまりものどく死ねど
あざけられてもわれはこれ
さてもあさまし盲目なり

「云ひてかへらぬくり言も
つらきうき世を身一つの

あつき涙にたぬかねて
迷しり出るまことのみ

「按摩」と呼ばふ聲するは
所見ゑねどかの高き
つまらぬおもひひるがへし
いざや。」
と立ちて杖取りぬ

杖はあれども足たゆく
はこぶにつらき秋風に
聞けばかなたのおはしまで

しきりによばふ按摩來マサージ」



附貧民の聲終

明治卅四年一月廿九日印刷
全 卅四年二月一日發行

定價金拾五錢

著作
所有

編輯者兼 上村才六
東京市麹町區三番町五十三番地

印刷者 池田良藏
東京市神田區錦町二丁目三番地

印刷所 知足堂

發行所 東京市麹町區三番町五十三番地 鳴阜書院

